千葉大学大学院人文公共学府　研究プロジェクト報告書　第 360 集　pp. 12-21
『対照的手法に基づく日本語研究』(2020)

アイヌ語樺太方言における斜格名詞の関係節化

―場所を表す名詞が主名詞の場合を中心に―*

阪口　諒
（千葉大学人文公共学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）

キーワード：アイヌ語、樺太方言、連体修飾節、関係節、補文節

はじめに

日本語とアイヌ語は、SV/AOV 語順や修飾詞前置語順など、構文的に大きな類似性を持っている。連体修飾節[1]が主名詞（head noun）に先行する点は両言語に共通するものの、連体修飾節と主名詞との間の格関係をいかに標示するかということに関して、アイヌ語と日本語の間には差異が見られる。日本語の連体修飾構造には、連体修飾節とそれが修飾する名詞との関係として、いわゆる「内の関係」、「外の関係」として知られるものがある。そのうち「底」（＝主名詞）と「外の関係」にある連体修飾節（＝名詞補文節 (noun complement clause)）は、アイヌ語では名詞化辞（補文化辞 (complementizer)）によって示されることが普通であり、「内の関係」にある連体修飾節（＝関係節 (relative clause)）とは形式的に表現方法が異なっている（以上、「」で括ったのは寺村 (1992[1975]) の用語）。

本稿では、アイヌ語樺太方言で書かれた自伝である『あいぬ物語』（山邊著、金田一編 1913）を資料とし、連体修飾節（noun-modifying clause）を扱う[2]。そのうち、斜格名詞の関係節（relative clause）を中心とする。アイヌ語の関係節（切替 (1984)でいう「連体修飾」）と補文節（田村 (1971) でいう「文の名詞化」）に関しては、すでに奥田（1989b）や Bugaeva (2015) [= Bugaeva (2017)] で詳しく検討されているが、本稿では、斜格名詞、特に「～するところ」という意味を表す関係節構造を中心に検討する[3]。

以下では、連体修飾節構造のうち、「底」に当たるものを主名詞とする。主名詞と「内の関係」に相当する連体修飾節を関係節とし、その節と主名詞を合わせて関係節構造とする。主名詞と「外の関係」に相当する連体修飾節を補文節とし、その節と主名詞を合わせて補文

---

* 本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号 20J11234）による成果の一部である。

[1] なお、「内の関係」の連体修飾＝関係節と「外の関係」の連体修飾＝名詞補文節とが同じ構造を有するという、いわゆるアジア式関係節を主張する研究もあるが（Comrie (1996), Matsumoto (1997)）、Bugaeva & Whitman (2016) は、それらの研究でアジア式関係節を持つとされる日本語、朝鮮語、ネネツ語、トルコ語、サハ語においても、動詞に標示される人称・数と N' pronominalization から、主名詞に先行する関係節と名詞補文節とが明確に分かれていることを示している。関係節構造を有する場合は、主名詞を「の」に置き換えられるが、名詞補文節の場合はそれが不可能であるという。例えば、「[[漁師が焼いた]魚]は無くなったが、[[君が焼いた]**の**]は残っている。」は可能なのに対し、「*[[さんまを焼いた]におい]は消えたが、[[イワシを焼いた]**の**]は残っている。」は非文となる。

[2] 後で述べる主名詞と「外の関係」にある連体修飾節が「修飾」しているとは言えるかは疑問だが、本稿では、Bugaeva (2015, 2017) と同様、「内の関係」「外の関係」にある節を合わせて連体修飾節（noun-modifying clause）とする。なお、Bugaeva (2015) と Bugaeva (2017) の内容は同一である。

[3] 関係節に対して主語、目的語の関係にある語が主名詞となる場合は、奥田（1991）や Bugaeva (2015) [= Bugaeva (2017)] に述べられている通りである。なお、向格（allative）に当たる名詞などが主名詞となっている例を筆者は見付けることが出来なかったため、本稿ではこの点に関して扱っていない。

構造とする。

使用テキスト

本稿の分析対象は、アイヌ語樺太方言テキストで書き記された『あいぬ物語』(山邊著、金田一編 1913) である。『あいぬ物語』は、樺太アイヌの山邊安之助 (1867?～1923) が語った生誕から北海道の対雁への強制移住、日露戦争、南極探検などのエピソードを、言語学者金田一京助が筆録し、日本語との対訳にしたものである。山邊氏は亜庭湾沿岸の弥満別 (現 Novikovo) 生まれだが、1875 年の樺太千島交換条約の締結に伴って北海道へ移住した。1893 年にロシア領サハリンに自力で帰還し、東海岸のトンナイチャ (日本領時代の富内、現 Okhotskoe)、のち日本領時代に近隣のオチョポカ (日本領時代の落帆、現 Lesnoe) に居住する。山邊氏のアイヌ語はサハリン (樺太) 帰郷後に落ち着いたトンナイチャ (富内) やオチョポカ (落帆) の言葉というよりは、アニワ湾東部沿岸の言葉が強く反映されていると思われる。なお、本文に掲載する例文はすべてこの資料から引用し、例文の最後に掲載頁を示した。

1. 日本語とアイヌ語の連体修飾節構造—関係節と補文節

日本語の連体修飾節の構造上のタイプ分けとしては、寺村 (1992[1975]) による「内の関係」と「外の関係」という二分法が広く知られている[4]。寺村 (1992[1975]) は、修飾節の述語動詞が主名詞と格関係を有する場合を「内の関係」と呼び、修飾節の述語動詞が主名詞と格関係を持たず、修飾節が主名詞の内容を表しているようなものを「外の関係」と呼ぶ (奥津 (1974) では、「内の関係」、「外の関係」は、それぞれ「同一名詞連体修飾」、「付加名詞連体修飾」と呼ばれる)。日本語の連体修飾節構造における「内の関係」は、連体修飾節の述語動詞と主名詞の格関係という文法的な要因に依拠しているものの、「非常に美しい村」(＜村が非常に美しい)、「私たちが住む村」(＜村に私たちが住む) のように、主名詞と連体修飾節の述語動詞との格関係を形式的に標示する格助詞が明示されない。

アイヌ語において、以上のような「内の関係」(＝関係節) と「外の関係」(＝補文節) は、修飾節の構造によって形式的に区別される。「内の関係」は、切替 (1984) が「連体修飾」と呼ぶタイプの名詞句の構造に相当するが[5]、この場合、原則として、主名詞の格役割が維持された形で連体修飾節が構成される必要がある (切替 1984)[6]。その一方、日本語の「外の関係」に相当するものは、名詞化辞 (補文化辞) による「文の名詞化」(田村 1971) である。この構造を、田村 (1971: 411) は「完結文となり得る動詞句＋名詞化辞としての形式名

---

[4] この二分法以外にも意味的な関係から、①主名詞が連体修飾節の表す事象の参与者と考えられるもの、②連体修飾節が主名詞の内容を表すもの、③主名詞が修飾節と主節とを意味的に結び付けるもの、などのタイプ分けがある (大島 2014: 681)。

[5] これに関しては知里 (1956: 227) が合成名詞の構造について述べる中ですでに触れられており、日本語で「神が・遊ぶ・広場」「鹿が・出てくる・沢」「丸山の・ある・沢」というところを、アイヌ語では kamuy o-sinot mintar「神が・そこで・遊ぶ・広場」、yuk o-san nay「鹿が・そこへ・出てくる・沢」、tapkop e-an nay「丸山が・そこに・ある・沢」というような言い方をするのだと指摘している。

[6] 切替 (1984: 106) では次の例が挙げられている (ari「～で」が保持されている)。

ari　a-nuye　kor　okay　unuypa　wakka
～で　IND-入墨する　て　いる　入墨(の)　水
「彼女がいれずみされているいれずみの水」(原出典は知里 1953: 932、表記とグロスは変更)。

詞または名助詞」と規定している。ここでいう完結文とは、動詞の要求する主語や目的語などの項をすべて内部に持っている文を指す（「連体修飾」節＝関係節の場合は、動詞の要求する項が一つ足りない)。

2. アイヌ語の関係節

2. 1. 主語・目的語が主名詞となる場合

アイヌ語の関係節では、述語は人称・数を標示した動詞人称形を前提とする（例文１，２は三人称、例文３は一人称。三人称は人称が明示されない)。「元の文」の述語動詞の主語、目的語を主名詞とする関係節化は、以下の例のように、主語、目的語を抜き出すことで行われる。アイヌ語には主格、目的格を表示する格標識はないので、表面上、日本語と似ているが、日本語は関係節化の際に格助詞「が」や「を」を明示しないという点で異なる。以下、例文で [ ] で括った部分は、それが関係節であることを示し、太字はそれが主名詞であることを示す。

主語の関係節化

(1)　テーコロ、ピリカ、コタン、
[teekoro　pirika]　**kotan**
非常に　美しい　村
「非常に美しい村」(175 頁)

(2)　ヌチヤ、イタ、ワンテ、　アイヌ、
[nuca　ita　wante]　**aynu**
ロシア　語　知っている　人
「ロシア語を知っている人」(100 頁)

目的語の関係節化

(3)　アウワンテ、　アイヌ
[an-wante]　**aynu**
1PL-知っている　人
「私たちが知っている人［＝知人]」(43 頁)

(4)　フシコ、オロワノ、アイヌ、イツシンネ、エラミシカリ、オルシペ、
[husko　orowasno　aynu　issinne　eramiskari]　**oruspe**
古く　から　人　一同　知らない　話
「古くから人々が皆知らない話」(90 頁)

2. 2. 斜格名詞が主名詞となる場合

山邊著、金田一編 (1913) においては、関係節の述語動詞に対して斜格の位置にある名詞が主名詞となった例も確認できる（ただし、向格 (allative) の例は確認できていない)。例文５のような文に対して、場所格（locative）の名詞 kotan「村」を主名詞とする関係節構造では例文６のように、格標識 ohta が保持される（格標示に下線を引いた)。これはすでに奥田（1989a, b）で扱われている通りである。

場所格名詞の関係節化

(5)　ター、コタン、オツタ、オカイ、アナツシ、
taa　kotan　ohta　okay-an　ahsi
この　村　～に　暮らす-1PL　PL
「この村に私たちは暮らした。」(176 頁)

(6)　オツタ、　オカイ、アン、　コタン
[ohta　okay-an]　**kotan**
～に　暮らす-1PL　村
「(そこに) 私たちが暮らす村」(175 頁)

主名詞 sipoh「箱」、kampi「紙」が、関係節内の述語動詞と場所格の関係にある場合も例文 6 の場合と同様に ohta「～に」が標示される。

(7)　ヌチヤ、テツポ、タマ、オツタ、アフン、シポホ
[Nuca　tehpo　tama　ohta　ahun]　**sipoh**
ロシア　鉄砲　玉　～に　入る　箱
「ロシアの鉄砲玉が（そこに）入っている箱」(113 頁)

(8)　ハルキ、ポロトノ、レイヘ、オツタ、アン、カンピ
[Haruki　poro-tono　reehe　ohta　an]　**kampi**
晴気　大きな-殿　の名　～に　ある　紙
「晴気少佐の名前が（そこに）ある紙［＝晴気少佐の名刺］」(140 頁)

(9)　ナンキヨク、タンケン、オツタ、オマン、ウタラ、レーヘ、
[[*Nankyoku*　*Tanken*　ohta　oman]　utara　reehe
南極　探検　に　行く　人たち　の名前
オツタ、アン、カンピ
ohta　an]　**kampi**
～に　ある　紙
「南極探検に行った者たちの名前が（そこに）ある紙」(182 頁)

例文５～９から、場所格に置かれた普通名詞を主名詞とする名詞句を関係節化によって作る場合、関係節内に ohta が保持されることが分かる。日本語の場合、「村に私たちが暮らす」という文から、「村」を主名詞とした名詞句を作る場合、名詞の「村」を文から抜き出して動詞句の後ろに置くだけでなく、格助詞「に」を削除する必要がある。

奪格名詞の関係節化

関係節内の述語動詞に対して主名詞が奪格（ablative）の関係にある場合も、oro「～から」が保持される。樺太方言では、oro はそれのみで、orowa「～から」と同じ意味を持つ[7]。次の例 10, 11 のように、oro は関係節に保持される。

[7] これはすでに知里（1973 [1942]: 537）で「oro は樺太では、格助詞無しに、格助詞の附いた oro wa〈そこから、それから、から〉と同じ意味に用ひられる」と指摘されている通りである。oro が格助詞 wa と融合していると考えることもできるが（語形が ora ではない点から難がありそうだが）、orowa, orowano という語形もあるので、格助詞 wa が明示されていないものとひとまず考えておく。

(10)　オロ、　　ホプニ、アン、チセ
[oro　　hopuni-an]　　**cise**
～から　　出発する-1PL　　家
「(そこから) 私たちが出発する家［＝根拠地］」(180 頁)

(11)　オロ、　　ホプニ、アン、　テント
[oro　　hopuni-an]　　**tento**
～から　　出発する-1PL　　テント
「(そこから) 私たちが出発する天幕［＝根拠地の天幕］」(182 頁)

なお、斜格名詞句の関係節において格標示が保持されると述べてきたが、節の述語が場所を目的語として取る動詞である場合には、斜格名詞ではなく、目的語として扱われるため、格標識に相当するものが述語動詞のほうに保持される。例文 12 では場所を目的語として取らない自動詞 ahun「入る」が用いられているのに対して、例文 13～15 は、場所を目的語として取る動詞 oro'o(o)「～を（場所）に入れる」が用いられている。そのため、表面上、格標識が現れていないように見える（主名詞との格関係を表す部分に下線を付けた)。

(12)　ヌチヤ、テツポ、タマ、オツタ、アフン、シポホ　（＝例文 7）
[Nuca　tehpo　tama　ohta　ahun]　**sipoh**
ロシア　鉄砲　玉　～に　入る　箱
「ロシアの鉄砲玉が（そこに）入った箱」(113 頁)

(13)　アン、ウカツシ、タマ、　オロ、　　シポ
an-uk　ahsi　[tama　oro('o)]　**sipo(h)**
1PL-取る　PL　弾丸　～を～に入れる　箱
「私達の分捕りした、［ロシア人が］弾丸を（そこに）入れた箱」(114 頁)

(14)　ペコ、カム、カンツメ、オロ、オ、　　シポ、
[peko　kam　*kantsume*　oro'o]　**sipo(h)**
牛　肉　缶詰　～を～に入れる　箱
「［ロシア人が］牛肉の缶詰を（そこに）入れた箱」(113 頁)

(15)　ペコ、カム、　オロ、　　シポ、
[peko　kam　oro('o)]　**sipo(h)**
牛　肉　～を～に入れる　箱
「［ロシア人が］牛肉を（そこに）入れた箱」(113 頁)

3. 場所を表す形式名詞 i が主名詞となる場合—関係節

さらに、アイヌ語には、日本語の「ところ」などと同じく、形式化した語も、主名詞として連体修飾構造を形成する。「～するところ」という表現を作るのに、形式名詞（拘束形態素）i[8]が用いられた場合、格標識を明示しないと、アイヌ語としては不適格になる可能性がある。形式名詞 i を用いて「～するところ」という表現を作るときは、kotan「村」などの普

[8] ここでいう形式名詞は佐藤（2008: 180）にある通り、関係節化を受けて連体修飾名詞句を作る独立性の低い名詞のことを指す。同じく、単独で現れない独立性の低い名詞のうち、関係節ではなく補文節をとる名詞を名詞化辞とする。

通名詞と同じく関係節化を必要とする[9]。次の例も、例文５～９と同じく、関係節内の述語動詞と i の格関係が分かるように ohta「～に」が標示されている[10]。

(16)　ヌチヤ、ウタラ、オツタ、オカイ、アツシ、イ、ピリカノ、アン、ヌカラツシ、クス、
[nuca　utara　ohta　okay　ahsi]　**i**　pirikano　an-nukara　hsi　kusu
ロシア人　たち　～に　いる　PL　所　よく　1PL-見る　PL　ため
「ロシア人たちが（そこに）いる所を私たちはよく見るため」(114 頁)

(17)　ヌチヤ、ウタラ、オツタ、オカイ、アツシイ、ナツタ、ヘタネ、ヤ、
[nuca　utara　ohta　okay　ahsi]　**i**　nahta　hetaneya?
ロシア　人たち　～に　いる　PL　所　どこ　か
「ロシア人たちが（そこに）いる所はどこか？」(124 頁)

なお、Bugaeva (2015: 91) [= Bugaeva (2017: 228)] は、hi「所／時／事」が修飾節を持つたいていの場合、補文化であるとする[11]。しかし、すでに奥田（1989a）で指摘されているように、「～するところ」という名詞句を作る hi/i は関係節化を必要とするのが普通であるのに対し「～するとき」という意味の名詞句の場合、hi/i は必ず補文節を取る。

4. toko(ho)「～するところ」が主名詞となる場合

ただし、山邊著、金田一編 (1913) では、形式名詞 i と同じく「～するところ」という意味を表す toko(ho) を主名詞とする名詞節の場合、連体修飾節内に ohta や oro のある例は見つからない。形式名詞 i の場合、例文 16, 17 のように、主名詞の格を明示する ohta「～に」が連体修飾節の中に置かれて、全体が関係節構造になっているのに対し（日本語においても、「ところ」は「内の関係」で修飾される）、toko(ho)「～するところ」のほうは補文節に見える例がほとんどである[12]。山邊著、金田一編 (1913) で、toko(ho) が連体修飾節と場所格の関係にある全５例を以下に示す（例文 18～22）。

---

[9] なお、本稿の資料において、奥田（1989a, b）で扱われているような hi（本稿で用いた資料に出てくる i に相当する形式）が「～するとき」を表す例を筆者は確認できていない。「～するときに」という意味を表すには、補文節の後に ohta（「(場所）に」と同じ形式）を付加するのが普通である（「～するとき」を表すのに補文節が用いられる点は北海道方言と共通する）。
例：　neanpehe　an-kii　si　**ohta**
そのこと　1PL-する　PL　ときに
「そのことをしていたとき」(179 頁)

[10] … i ohta nuca utara okay「～なところにロシア人たちがいる」という文から、例文８，９の「ロシア人たちが（そこに）いる所」(nuca utara ohta okay ahsi i）という名詞句が作られたと考えると理解しやすい。

[11] この個所で参照されている Tamura (2000: 125-127) [=田村 (1988: 46-47)] では hi「こと／とき／ところ」を名詞化助辞（nominalizing particle）と指摘するにとどまっているが、Tamura (2000) [=田村 (1988)] とともに参照されている佐藤（2008: 175-176）では、hi のうち「こと、の、時」という名詞句を作る hi のみを扱っているのであり、「～するところ」という名詞句を作る hi（＝関係節化を必要とする形式名詞）を名詞化辞として扱っているわけではない。

[12] 同じく西海岸北部の民話では、ohkayo okay tokoho「男が・いる.PL・ところ」のように ohta がない例とともに、連体修飾節に ohta が保持された例も見つかる（山邊編、金田一著 (1913) では tokoho に後続するのは ta であり、ohta が後続した例はない）。
例：　oyasi　taa,　neya　unci　ohta　ama　**tokoho**　ohta　oman-ihi　neanpe
お化け　強調(?)、　その　火　～に　置く　所　に　行く-NML　TOP
「お化けが、その火を置いた所へ行ったところ、」(村崎編訳 2001: 30)

(18)　ヌチヤ、　ウタラ、　オカイ、　トコホ
nuca　utara　okay　**tokoho**
ロシア人　たち　いる.PL　所
「ロシア人がいる所」(106、117 頁)

(19)　ヌチヤ、　ウタラ、オカイ、アツシ、トコホ
nuca　utara　okay　ahsi　**tokoho**
ロシア人　たち　いる.PL　PL　所
「ロシア人がいる所」(111 頁)

(20)　ヌチヤ、　オカイ、　トコ
nuca　okay　**toko**
ロシア人　いる.PL　所
「明日またロシア人がいる所」(104 頁)

(21)　プンキ、カラ、アイヌ、アン、トコ
punkikara　aynu　an　**toko**
見張りする　人　いる　所
「歩哨の人がいる所」(141 頁)

(22)　エアニ、エ、アマ、トコ、エ、ワンテ、ヘ、　ネー、　ナンコー、」
eani　e-ama　**toko**　e-wante-he　nee　nankoo.
お前　2SG-置く　所　2SG-知っている-NML　COP　だろう
「お前は［アイヌから取り上げた物を］置いた所を知っているのだろう！」(131 頁)

主名詞が toko(ho)「～の所」である名詞句の場合、上の例のように、節内に格標識は見られず、補文節構造であるように見える（特に例文 16, 17 と、例文 18～20 を比較)。この点で、述語動詞との格関係を保持したまま関係節化が行われる普通名詞や形式名詞 i「～するところ」とは形式的に差異があるように感じられる。なお、北海道西南部方言において、形式名詞（佐藤 2008: 181）[13]とされる usi(ke)（沙流方言では uske(he)）「～するところ」があるが[14]、これも toko(ho) と同様、連体修飾節内に格標識が現れない例が多い（Bugaeva (2015: 89, 95) [= Bugaeva 2017: 225, 234]）[15]。

5. 形式名詞 i「ところ」と toko(ho) の連体修飾節構造の差異

関係節化される形式名詞 i（ただし、「～するところ」という意味の名詞句を作る場合に限る）と、関係節化されないことの多い toko(ho) の構造の違いは、主名詞の語形にも表れていると考えられることもできる。tokoho は普通名詞の所属形と同じく基本形 toko の最後の

---

[13] Bugaeva (2015: 89) [= Bugaeva (2017: 225)] では関係名詞（relational noun）とされている。関係名詞は、アイヌ語学において伝統的に位置名詞とされてきた名詞で、空間・時間の相対的位置を表す。

[14] 北海道方言の usi(ke)と同様、樺太方言の toko にも、「～するとき」を意味する用例が見られる。
例：　チエ、アン、コイキ、ナハ、アネラム、オカイ、トコ、オツタ、
ce(h)　an-koyki　nah　an-eramuokay　**toko**　ohta
魚　1PL-獲る　と　1PL-思う.PL　とき　に
「魚を捕ろうと思ったときに」(75 頁)

[15] Bugaeva (2015: 89) [= Bugaeva (2017: 225)] に挙がっている、格標識 oro ta が標示された例文は次の通りである（沙流方言)。
[oro　ta　KOTCO　e　pa]　**uskehe**　ne　hawe　ne　kusu　ki.
そこ　で　御馳走　食べる　PL　ところ　COP　話　COP　ので　する
「ご馳走を食べたところだという話だから（そのように）しなさい」

母音が語尾となる点で、普通名詞の所属形と同様の形成法をとっている。Bugaeva (2015) [= Bugaeva (2017)] は、関係節構造は修飾部と主名詞が並置される名詞修飾構造（nominal attributive construction）に、名詞補文節構造は主名詞に所属接尾辞を付す主要部標示型の所有構造（possessive construction）に由来するとしている。tokoho は所属形相当とも考えられるが、北海道西南部方言の usike に関しては、名詞の所属形とは言えない[16]。この点で、補文節と同じ構造を有すると言うことはできない。また、関係節化を必要とする形式名詞 i「ところ」と、関係節化を必要としないように見える toko(ho) の構造の違いには、それぞれの名詞の性質の違いが関わっていると思われる。toko(ho) は位置名詞（positional noun）と考えられるが、それは文法的に「場所」（中川 1983, 1984）として扱われ、ohta が後続しない。つまり、関係節化を行うときに格標識 ohta が保持されないと想定される（見かけ上は補文節構造となる）[17]。それに対して、形式名詞は文法的に「場所」として扱われず、関係節内部に ohta が明示される。toko(ho) と同じく、北海道西南部方言の usi(ke) もまた位置名詞と思われるが、そのために、ohta「～に」が後続せず[18]、格標識が明示されないのではないか、と推測される[19]。

終わりに

本稿の結果は、アイヌ語の連体修飾節に関する先行研究である奥田（1989a, b）や Bugaeva (2015, 2017) とも矛盾しない。特に奥田（1998a）が扱う「～するところ」を意味する名詞句を作る(h)i と本稿で扱った形式名詞 i は同じく関係節化を必要とする点で共通している（樺太方言の「～するとき（に）」を表す oh(ta) も、北海道方言で「時／事」を表す hi と同様、補文節を取る）。また、樺太方言には、形式名詞 i と同じく「～するところ」を表す toko(ho) が見られるが、toko(ho) は形式名詞 i と異なり、toko(ho) は文法的に「場所」として扱われ

[16] usi に対する usike は、位置名詞（関係名詞）の長形に相当する（普通名詞の所属形ならば usihi が期待される）、。位置名詞の長形の形成法は、普通名詞の所属形形成法と一見同じように見えるが、基本形に-i, -ke を付けるものがあるなど、異なる面も多い。なお、位置名詞の長形は、相対的位置・時間の基準を示す名詞が省略されている場合にとる形態である。tokoho に関しては基本形の最後の母音が語尾となる点で、普通名詞の所属形形成法と同様に形成されているが、単独で出現することがなく、普通名詞として扱えるとは思われない。

[17] 北海道では、樺太と密接な関係を持つ宗谷を除いて toko(ho) が用いられない（服部編 1964: 234）。そのことからして、アイヌ語としては比較的新しい表現だと推測される。また、日本語の「とこ（＝所）」と語形が類似していることからして、日本語から借用された表現の可能性も考慮に入れる必要があるだろう。toko(ho) の連体修飾節が補文節とみなせる場合が多いことの理由は、日本語の「とこ（ところ）」を主名詞とする名詞句構造（＝格助詞を明示しない関係節）からの直訳が元になっていることも考えられるかもしれないが、関係節化によって同じく「～するところ」という名詞句を作る形式名詞 i が存在すること（こちらが日本語の「とこ」に影響されない理由を考える必要が出る）、また、すでに述べたように、北海道方言の usi(ke) にも同様に格標識が明示されない事例があることから、この可能性は低いように思われる。

[18] 山邊著、金田一編 (1913) では、toko の場合、toko ohta「～のところ・に」となるが、tokoho（長形）の場合には tokoho ta「～のところ・に」となる。ただ、この点に関しては、樺太西海岸北部方言の民話集である村崎編訳（2001）では tokoho の時も ohta が後続するなどいくつかの問題がある（註 15 参照）。また、北海道方言と比べて、文法的な「場所」の表現の扱いに多少の差異があると考えられる点からも（例えば、地名の後にも ohta［北海道方言の otta (or ta) に相当］が後続するなど）、より慎重に検討を行う必要がある。

[19] Bugaeva (2015: 89) [= Bugaeva (2017: 225)] では、関係名詞［いわゆる位置名詞］uske(he)「～のところ」が通常、or-o「～のところ」（北海道西南部方言）を必要としないのに、それが主名詞となった場合、連体修飾節内部に oro ta「そこ・に」が標示されることがあると指摘されている（註 14 参照）。

る位置名詞であるため、連体修飾節内部に ohta「～に」が保持されない。そのため、見かけ上、補文節を取っているように見えると推測される。形式名詞 i「ところ」と同じく、「～するところ」という名詞句を形成する要素であることに変わりはないものの、toko(ho) は文法的に「場所」という性質をそれ自体が有しているため、関係節内部に格標識が現れないことが多く、見かけ上、名詞補文節構造の主名詞であるように見えるのだと考えられる。

略語一覧

1, 2, 3	1, 2, 3 人称	IND	不定人称	PL	複数	TOP	主題
COP	コピュラ	NML	名詞化接尾辞	SG	単数		

参考文献

Bugaeva, Anna (2015) Relative clauses and noun complements in Ainu. In: アンナ・ブガエワ、長崎郁編『アイヌ語研究の諸問題』: 73-107. 北海道出版企画センター.

Bugaeva, Anna (2017) Noun-modifying clause constructions in Ainu. In: Matsumoto, Yoshiko, Comrie, Bernard & Sells, Peter. *Noun-Modifying Clause Constructions in Languages of Eurasia:* Rethnking theoretical and geographical boundaries (TSL 116). John Benjamins: 205-252.

Bugaeva & Whitman (2016) Deconstructing clausal noun modifying constructions, *Japanese/Korean Linguistics* 23. Stanford: CSLI.

Comrie, Bernard (1996) The unity of noun modifying clauses in Asian languages. *Pan-Asiatic Linguistics: Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics, January* 8-10, Volume 3, 1077-1088. Salaya, Thailand: Institute of Language, and Culture for Rural Development, Mahidol University at Salaya.

Matsumoto, Yoshiko (1997) *Noun-modifying constructions in Japanese*: A frame semantic approach (Studies in Language Companion Series 35). Amsterdam: John Benjamins.

Tamura, Suzuko (2000) The Ainu Language. Tokyo: Sanseido. [田村 (1988) の英訳]

大島資生（2014）「連体修飾構造（連体句）[1]」日本語文法学会編『日本語文法事典』: 680-683. 大修館書店.

奥田統己（1989a）「日本語とアイヌ語における『～するところ』と『～するとき』の表現」『千葉大学大学院人文科学研究』2: 59-67.

奥田統己（1989b）「日本語とアイヌ語における連体修飾と文の名詞化」『早稲田大学語学教育研究所紀要』39: 1-14.

奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』大修館書店.

切替英雄（1984）「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」『言語研究』86: 105-121.

佐藤知己（2008）『アイヌ語文法の基礎』大学書林.

田村すず子（1971）「述部の構造に関する一考察―動詞句の要求する成分」服部四郎先生退官記念論文集編集委員会編『現代言語学』: 409-426. 三省堂.

田村すず子（1988）「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第 1 巻 世界言語編（上）』: 6-94. 三省堂.

知里真志保（1953）「アイヌ語の助詞」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古

稀記念 言語民俗論集』: 913-932. 三省堂.
知里真志保 (1973[1942])「アイヌ語法研究―樺太方言を中心として―」『知里真志保著作集』3: 456-586. 平凡社.
寺村秀夫 (1992[1975])「連体修飾のシンタクスと意味―その 1 ―」『寺村秀夫論文集』1: 157-207. くろしお出版.
中川裕（1983）「アイヌ語の場所表現と名詞の所属形」『言語研究』84: 197-198.
中川裕（1984）「アイヌ語の名詞と場所表現」『東京大学言語学論集'84』: 149-160.
服部四郎編（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
村崎恭子編訳（2001）『浅井タケロ述 樺太アイヌの昔話』草風館.
山邊安之助著、金田一京助編（1913）『あいぬ物語―附あいぬ語大意及語彙』博文館.

（さかぐち　りょう・千葉大学人文公共学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）